北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

銭起「闕下贈裴舍人」・「山中寄時校書」訳注

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大橋, 賢一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000070

錢起「闕下贈裴舍人」・「山中寄時校書」訳注

大橋賢一

【はじめに】

本稿は、中唐・高仲武『中興間気集』上巻所収錢起「闕下贈裴舍人」（七言律詩）、及び「山中寄時校書」（七言古詩）の訳注である。なお、『中興間気集』に収められている錢起の七言詩はこの二首に限られる。

底本は『中興間気集』（中華再造善本〈中国国家図書館蔵毛氏汲古閣影宋抄本影印〉、国家図書館出版社、二〇〇九年）とした。また、校勘の対象としては、四部叢刊所収『中興間気集』、汲古閣唐人選唐詩所収『中興間気集』（大通書局、一九七三年）、和刻本『中興間気集』（『和刻本漢詩集成』総集篇第一輯、汲古書院、一九七八年）とし、それぞれ四部叢刊本、汲本、和刻本と略称した。本稿ではこれ以外に、『文苑英華』（中華書局、一九六〇年）、『錢考功集』（四部叢刊所収本）、『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）を校勘の対象とし、『文苑英華』は英華と略称した。校勘を示す際には、時系列順とした。

この訳注は、〔本文〕〔書き下し文〕〔詩型〕〔韻字〕〔平仄〕〔訳〕〔校勘〕〔注〕〔補説〕からなる。〔韻字〕及び〔平仄〕は『広韻』によった。平仄については平声を○で、仄声を●で、平声の韻字を◎、仄声の韻字を◉で示した。〔注〕において唐以前の詩を引用するにあたっては、『文選』（上海古籍出版社、一九八六年）、『玉台新詠箋注』（中華書局、一九八五年）所収のものはこれらによる。それ以外のものについては、逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局、一九八三年）により、『全○詩』と略称して巻数を示した。また唐代の詩は『全唐詩』により巻数を示した。注釈は、二句ごとに示すことを原則としたが、古詩についてはその限りではない。

なおこの訳注は、筆者が「山中寄時校書」については二〇二三年四月二二日（於Zoom）開催の、「闕下贈裴舍人」については、二〇二三年九月一一日（於北海道教育大学大雪山自然教育研究施設）開催の中興間気集研究会で草稿を発表し、そこでの検討を経て修正を加えたものである。以下、『中興間気集』の掲載順に従い「闕下贈裴舍人」・「山中寄時校書」の順に訳注を示す。

闕下贈裴舎人

〔本文〕闕下に裴舎人に贈る

1春城紫陌曉陰陰　春城の紫陌　曉陰陰たり
2二月黄鶯飛上林　二月の黄鶯　上林に飛ぶ
3長樂鐘聲花外盡　長楽の鐘声　花外に尽き
4龍池柳色雨中深　龍池の柳色　雨中に深し
5陽和不散窮途恨　陽和散ぜず　窮途の恨み
6霄漢長懸捧日心　霄漢長く懸く　捧日の心
7獻賦十年猶未遇　献賦十年　猶ほ未だ遇はず
8羞將白髮戴華簪　羞づらくは白髪を将つて華簪を戴くを

〔詩型〕七言律詩

〔韻字〕上平声二十一侵韻（陰・林・深・心・簪）

〔平仄〕

○○●●●○○／●●○○○●◎
○●○○○●●／○○●●●○◎
○○●●○○●／○●○○●●◎
●●●○○●●／○○●●●○◎

〔訳〕都で裴舎人に詩を献呈する

1春のきた都もその郊外の道も明け方の光に満たされしずかで薄暗く
2仲春の二月にウグイスが華やかな上林苑のような宮中の御苑に飛んでいる
3長楽宮の鐘の音は遠くに咲く花のさらに向こうにまで響いて消えゆき
4興慶宮の龍池に植えられた柳の緑色は雨の中でよりいっそう深まる
5春ののどかな気配もわたしの不遇なうらみを消してはくれないが
6朝廷にはみかどに対する忠誠心を抱き続けている
7出仕のために十年も賦を献呈してきたが、いまだ取り立てられることもない
8そうしたことが続けば、しらが頭となって美しい簪をかざすことになるだろうが、そのことを恥ずかしく思う

〔校勘〕

詩題：○闕下贈…全唐詩（巻二三九）は「贈闕下」に作り、「一作闕下贈」と注する。銭考功集（巻八）は「贈闕下」に作る。
○裴…英華（巻二五三）は「閻」に作る。
一句目：○陌…英華・四部叢刊本・汲本・和刻本・全唐詩・銭考功集は「禁」に作る。また英華は「集作陌曉沉沉」と、全唐詩は「一作陌」と注する。なお、英華・四部叢刊本・汲本・和刻本・全唐詩・銭考功集は一・二句目が逆になっている。ただ、この場合だと平仄が合わなくなる。

○曉…英華は「晩」に作る。
○陰陰…全唐詩は「一作沈沈」と注する。英華は「集作陌曉沉沉」と注するが、銭考功集は底本に同じ。
二句目：○鶯…英華は「集作鸝」と注するが、銭考功集は「鶯」に作る。四部叢刊本・汲本・和刻本は「鸝」に作る。全唐詩は「一作鸝」と注する。
三句目：○鐘…英華は「鍾」に作る。
六句目：○長…英華・四部叢刊本・汲本・和刻本は「常」に作る。また英華は「集作長」と注するが、銭考功集は「常」に作る。
○懸…全唐詩は「懐」に作り、「一作懸」と注する。
八句目：○戴…底本は「一作對」と注する。英華・四部叢刊本・汲本・和刻本・銭考功集は「對」に作る。

〔注〕

闕下贈裴舍人

○闕下…宮門の下。「闕」は、宮中の門。ここでは広く都を意味していよう。なお、山田勝美『中国名詩鑑賞辞典』（角川書店、一九七八年）は、『呂氏春秋』開春論の「身は江湖に在るも、心は魏闕の下に繫がる」（引用文ママ）を引き、民間にあって出仕していなくても常に朝廷に対して忠勤を思っていることを暗示するという。
○裴舍人…未詳。なお、山田勝美『中国名詩鑑賞辞典』は、この「裴」を憲宗元和年間に登第した裴夷直（七八七～八五九）に比定するが根拠は不明。王定璋『銭起詩集校注』（浙江古籍出版社、一九九二年、以下王注と略称）、及び阮廷瑜『銭起詩集校注』（新文豊出版、一九九六年、以下阮注と略称）は未詳とする。「舍人」は官名。中書舍人（正五品上）、及び起居舍人（従六品上）があった。前者は、天子の側近として詔勅の起草を司り、後者は天子の側近で記録を司った。裴氏の官がどちらなのかは判然としない。本詩の制作年次について、王注は銭起が登第する以前、天宝一〇載（七五一）前に作られたと比定する。阮廷瑜「年譜簡編」（『銭起詩集校注』所収）は、銭起の三五歳前の作と比定する。天宝一〇載以前の作であれば、詩題の「裴舍人」は裴夷直に該当し得ない。焦文彬／張登第／魯安樹『大暦十才子詩選』（陝西人民出版社、一九八八年）、張学松／劉九偉／趙賀『大暦十才子伝』（吉林人民出版社、二〇〇〇年）は、本詩が裴（あるいは閻）舍人に取り立ててもらうために作られたとみなしている。

1春城紫陌曉陰陰／二月黄鶯飛上林

○紫陌…都郊外の道。「紫」は帝王に関わる語句につく接頭語。「陌」は道路。後漢・王粲「羽猟賦」（『芸文類聚』巻六六）に、「濟漳浦而横陣、倚紫陌而竝征（漳浦に済りて横陣し、紫陌に倚りて並びに征く）」とある。「漳浦」は、漳水の浜。「横陣」は、陣形をなすこと。魏の武帝が猟にでかける場面で「紫陌」が用

いられている。銭起詩における紫陌の用例はこの一例に限られるが、銭起と同じく大暦十才子に数えられる盧綸の詩には、「紫陌絶纖埃、油幢千騎來（紫陌纖埃絶え、油幢千騎来たる）」（「書情上大尹十兄」『全唐詩』巻二七八）というように三例ほどみられる。

○陰陰…静かで薄暗いさま。南朝斉・謝朓「直中書省詩」（『文選』巻三〇）では、「紫殿肅陰陰、彤庭赫弘敞（紫殿肅として陰陰たり、彤庭赫として弘敞たり）」というように、「紫殿（＝宮殿）」の幽暗なさまを描く際に用いられている。また、中唐・司空曙「送高勝重謁曹王」（『全唐詩』巻二九二）に「江上青楓岸、陰陰萬里春（江上　青楓の岸、陰陰たり万里の春）」とあるように、春のうすぐらさをも表し得る。

○二月黄鶯…仲春の二月に活動を始めるコウライウグイス。陸璣『毛詩草木鳥獸虫魚疏』に「黄鳥、黄鸝留也。或謂之黄栗留、幽州人謂之黄鶯（黄鳥は、黄鸝留なり。或いは之れを黄栗留と謂ふ、幽州の人之れを黄鶯と謂ふ）」とある。盛唐・王維「左掖梨花」（『全唐詩』巻一二八）に「黄鶯弄不足、銜入未央宮（黄鶯弄ぶこと足らず、銜へて未央宮に入る）」とあるように、宮中にいる鳥として歌われている。

○上林…長安にあった宮苑の名。上林苑は、秦代に造築されのち荒廃したが、それを前漢・武帝が新たに改築した。陝西省西安西部に位置した。『三輔黄図』巻四、苑囿に「漢上林苑、卽秦之舊苑也（漢の上林苑は、即ち秦の旧苑なり）」とある。山田勝美『中国名詩鑑賞辞典』は、これが『詩経』小雅「伐木」の「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶。出自幽谷、遷于喬木（木を伐ること丁丁、鳥鳴くこと嚶嚶。幽谷より出でて、喬木に遷る）」の意を含み、登用された人びとを暗示しているという。

3長樂鐘聲花外盡／龍池柳色雨中深…四句目は、雨によって柳の緑色が色濃くなっていることをいう。

○長樂…長楽宮。前漢・高祖のときに建てられた宮殿。当時の主要な宮殿の一つ。陝西省西安市西北に位置した。『三輔黄図』巻二、漢宮に、「長樂宮、本秦之興樂宮也。高皇帝始居櫟陽。七年長樂宮成、徙居長安城（長楽宮は、本と秦の興楽宮なり。高皇帝始め櫟陽に居る。七年長楽宮成りて、居を長安城に徙す）」とある。ここでは唐王朝の宮殿を喩える。具体的には「龍池」を含む興慶宮を喩えているかもしれない。

○鐘聲…長楽宮の鐘の音。梁・徐陵「玉台新詠序」に「厭長樂之疏鐘、勞中宮之緩箭（長楽の疏鐘に厭き、中宮の緩箭に労る）」とみえる。「疏鐘」は、時間を長くおいて聞こえてくる鐘の音。「緩箭」は、緩やかに動く水時計の時間を示すための矢。共に時間の流れの遅さを表す。「玉台新詠序」は宮廷での時間がゆったりながれていることをいうが、本詩のもまた、春の時間の緩やかな流れを象徴していよう。

○龍池…長安隆慶坊に建てられた興慶宮の中にあった池の名。「興慶池」ともいう。『景龍文館記』には、この池の側に、

五人の皇子の邸宅があったこと、加えて、池の上に雲気が立ち上り、龍がそこから現れたということが記され、池の名の由来がわかる。また、初唐・沈佺期「龍池篇」（『全唐詩』巻九六）中に「龍池躍龍龍已飛、龍德先天天不違（龍池に龍躍り龍已に飛ぶ、龍德天に先んじて天違はず）」と「龍池」の名が見えるように、初唐以降詩の題材として取り上げられている。

5陽和不散窮途恨／霄漢長懸捧日心

○陽和…春の暖かな気。『史記』巻六「秦始皇本紀」にみえる始皇帝二九年の刻石の辞に「維二十九年、時在中春、陽和方起（維れ二十九年、時　中春に在りて、陽和方に起く）」とあるように、春の陽気をいう。

○窮途恨…道が窮まったことに対するうらみ。『晋書』巻四九「阮籍伝」の「時率意獨駕、不由徑路、車迹所窮、輒慟哭而返（時に意に率ひて独り駕し、径路に由らず、車迹窮まる所、輒ち慟哭して返る）」を踏まえる。この詩では銭起が科挙に落第したことを暗示していよう。

○霄漢…天空。遥か遠くにあるもの。転じて朝廷を意味する。銭起よりあとの例に該当するが、晩唐・杜牧「書懐寄中朝往還」（『全唐詩』巻五二三）に「霄漢幾多同學伴、可憐頭角盡卿材（霄漢幾多の同学の伴、憐むべし頭角尽く卿の材なり）」とあるように、朝廷を暗示する。

○懸捧日心…「懸」は、つるしておくこと。「捧日心」は、君主に忠誠を尽くそうとする思い。「日」は太陽、転じて帝王のたとえ。『三国志』巻一四「魏志・程昱伝」中の裴松之注所引王沈『魏書』にみえる故事による。曹操が、程昱が泰山で両手に太陽をささげ持った夢を見たことを耳にし、程昱は自分の側近になると予測した。裴松之注所引の『魏書』は以下に示す通りである。

昱少時常夢上泰山、両手捧日。昱私異之、以語荀彧。及兗州反、賴昱得完三城。於是彧以昱夢白太祖。太祖曰、卿当終為吾腹心。

昱少き時常に泰山に上りて、両手もて日を捧ぐを夢む。昱私かに之を異とし、以て荀彧に語る。兗州の反するに及び、昱に賴りて三城を完とうするを得。是に於いて彧は昱の夢を以て太祖に白す。太祖曰く、卿当に終に吾が腹心と為るべし、と。

「懸心」は、気にかけ続けること。初唐・張鷟『遊仙窟』に「日夜懸心憶、知隔幾年秋（日夜心に懸けて憶ひ、知らん幾年の秋を隔つを）」とあるように、気持ちが不安定なまま気にとめ続けることを意味する。

7獻賦十年猶未遇／羞將白髮戴華簪

○獻賦…賦を献上して出仕しようとすること。『旧唐書』巻一九〇下「杜甫伝」に「天寶末、獻三大禮賦、玄宗奇之、召試文章、授京兆府兵曹參軍（天宝末、三大礼賦を献ず、玄宗之を

奇とし、召して文章を試み、京兆府兵曹参軍を授く）」とある。ただここでは、「獻賦」のあとに「十年」という語句が続いていることから、出仕するための努力を十年ほど続けたことを意味しよう。なお、阮廷瑜「年譜簡編」によれば、銭起が科挙に応じ始めたのは、天宝六載（七四七）以降で、登第したのは四年後の天宝一〇載である。

○白髪…しらが。銭起自身を指す。銭起詩には、四例の白髪があるが、例えば銭起「長安旅宿」（『全唐詩』巻二三六）では、「明旦北門外、歸途堪白髮（明旦北門の外、帰途白髪に堪へん）」というように、都で思うように行かない嘆きが白髪になってしまうことを描くことで表わされている。

○華簪…役人の身につける美しいかんざし。東晋・陶淵明「和郭主簿二首」其一（『全晋詩』巻一六）に、「此事真復樂、聊用忘華簪（此の事真に復た楽し、聊か用て華簪を忘る）」とある。「此事」は、淵明の子どもが幼くことばが明確ではないことを指す。そうした日常が華美な宮中生活を忘れさせてくれることをいう。銭起の場合は、役人になることに対する執着を「華簪」に託していると考えられる。また銭起「省中春暮酬嵩陽焦道士見招」（『全唐詩』巻二三七）では、「流年催素髮、不覺映華簪（流年 素髪を催し、覚えず華簪に映ゆるを）」と、白髪（＝素髪）に「華簪」が映えない嘆きが歌われている。

〔補説〕

本詩は、銭起の詩の中では、後代比較的多くの文人に着目されたものである。阮注の「評説」には、宋代から清代に至る文人の評語が一三条引用されている。その筆頭は、『中興間気集』の撰者高仲武によるものだろう。高仲武は、『中興間気集』銭起の評で、本詩頸聯を引き、「皆特（ひと）り意表を出でて、古今に標準たり（皆特出意表、標準古今）」と述べている。「意表」とは、言外の意、ことばの裏にある意味をいう。

この一聯に着目した後代の評語としては、例えば南宋・胡仔『苕溪漁隱叢話後集』巻一七の、

長樂鐘声花外盡、龍池柳色雨中深、此等句皆当時相傳爲警絶。

長楽の鐘声花外に尽き、龍池の柳色雨中に深し、此れ等の句は皆当時相ひ伝わりて警絶為り。

といったものや、清・方東樹『昭昧詹言』巻一八の、

前四句寫閣景氣象、真僕自然不減盛唐王摩詰。後四句託贈常語、平平耳。

前四句は閣景の気象を写す、真僕自然にして盛唐王摩詰に減ぜず。後の四句は託贈の常語にして、平平なるのみ。

といったものをあげることができる。方東樹が指摘するように、本詩の後半四句は確かに平凡に過ぎないかもしれないが、前半四句は印象深い表現となっており、とりわけ頸聯は、高仲武や胡仔が注目するように、警抜な二句となっているように感じられる。二人がこの二句に目をつけた理由はいくつかあるだろう

が、ここでまず注目したいのは、「長楽」と「龍池」という地名である。前者は漢代に用いられた地名で、後者は唐代発祥のものである。上の句と下の句で、時間的な錯綜が生じる。唐王朝を漢王朝に見立てることは、唐代以降の詩では一般的になっており、白居易「長恨歌」の冒頭「漢皇色を重じて傾国を思ひ、御宇多年求むれども得ず」を挙げるまでもなく枚挙に暇が無い。しかし、本詩の場合は同じ長安という都に関して、漢代の地名と唐代の地名を同時に使うことで、漢代から引き継がれる、王都としての品位や伝統美が兼ね備わる都の威厳が表現されていると考えられる。

一方で、その都に対する筆者、銭起との距離間であるが、阮注など諸注が指摘するように、本詩が、銭起の希望とは裏腹に、出仕が叶わない現状をうたっているのだとすれば、精神的に相当な距離感のあることが想像できる。その自身と都との距離感が、頷聯では非常に巧みに表現されているのではなかろうか。

上の句では、都の鐘の音が、都の郊外にある花々で消えかかっていることが描かれるが、銭起のいる場所がここであるとすれば、鐘の音が遠く響く場所にしか身を置くことのできない銭起の悲哀が現れていると考えられよう。一方、下の句では雨が降りしきることによって、都の中心部に位置する龍池が霞んでみえることをいう。明確に自身の目に捉えることができないというこの表現も、都の中心、より踏み込んでいえば政治の中枢から遠いところに身を置かざるを得ない、銭起自身のふがいなさを表現し得ていると考えられよう。都との距離を縮めたいという切実な思いが、後半の四句には示されているが、この思いが切実に感じられる理由の一つは、この前半四句、とりわけ頸聯の巧みな表現が担っているからにほかならない。

ところで、この詩の詩型は七言律詩である。七言律詩は、『中興間気集』に限って言えば、主流ではなく、五言律詩が大半を占めている。全一四三首を数える中、七言律詩は八首を数えるに過ぎず、一割も満たしていない。また、贈答詩、寄贈詩としては、本詩と皇甫曽「早朝日寄所知」の二首に限られる。方東樹は、本詩に王維の影響をみるが、少なくとも詩型についての影響の有無については判然としない。本詩における詩型及び王維との関連性については、引き続き考えていきたい。

山中寄時校書

〔本文〕山中に時校書に寄す

1蓬萊仙子温如玉　蓬萊の仙子　温なること玉の如し
2唯予知爾陽春曲　唯だ予のみ爾の陽春曲を知る
3別來幾日芳蓀綠　別れてより来幾日か芳蓀緑なる
4百花滿眼不見君　百花眼に満つるも君を見ず
5青山一望心斷續　青山一望　心断続

〔詩型〕七言古詩

〔韻字〕入声三燭韻（玉・曲・綠・續）

〔平仄〕

○○○●○○◉
○○○●○○◉
●○●●○○◉
●○●●●●○
○○●●○●◉

〔訳〕山の中で時校書に詩を寄せる

1蓬莱山（＝秘書省）にお住いの仙人（＝時校書）の性格はおだやかでまるで玉のよう。
2ぼくだけがあなたが「陽春曲」のように典雅な歌を歌っていることがわかっている。
3ぼくらが別れてからどれぐらいになったことか、もう香り草が青々と生い茂っている。
4様々な花々が視界を満たすほど春真っ盛りなのに、きみに会えない
5新緑の青々とした山を遠くに眺めながら、きみに会いたくても会えず今にも心が断ち切れてしまいそうだ

〔校勘〕

詩題：○山中…英華（巻二五三）は、この上に「雑言」の二字を附している。
一句目：○仙子…英華・四部叢刊本・汲本・全唐詩（巻二三六）・和刻本・銭考功集（巻三）は「紫気」に作る。また、英華・全唐詩は、「一作之子」と注する。
三句目：○満眼…四部叢刊本・汲本・全唐詩・和刻本・銭考功集は「酒滿」に作る。また全唐詩は「一作滿眼」と注する。英華は「眼」に「集作酒」と注するが、銭考功集は「酒滿」に作る。
五句目：○心…英華は「集作觴」と注するが、銭考功集は「心」に作る。全唐詩は「一作觴」と注する。

〔注〕

山中寄時校書

○時校書…未詳。「時」は姓であろう。王注は「送時、暹避難適荊南」（『全唐詩』巻二三七）にみえる「時暹（じせん）」が本詩の「時校書」である可能性を示唆している。「校書」は官名。秘書省などに属し典籍の校勘などを司る。王注は本詩の制作時期について、銭起が秘書閣の校書郎としての同僚であったことを根拠として、天宝の晩期（七五六前後）の作とみなしている。詩題の「山中」は、どの山を指しているのか判然としない。

なお、『英華』は詩題を「雑、言、山中寄時校書」とするが、阮注は、銭起の別集の目録に「雑、言、二十八首」と記されていることを踏まえ、「雑言」の二字を『文苑英華』の編者が付け加えたものとみなしている。

1蓬萊仙子溫如玉

○蓬萊…蓬萊山。東海にあるという神仙の住む山。ここでは、秘書省の別称として用いられている。蓬萊山が秘書省の別称として用いられるようになったのは、『後漢書』巻二三「竇章伝」の、「是時學者稱東觀爲老氏臧室、道家蓬萊山（是の時学者東観を称して老氏の臧室、道家蓬萊山と為す）」という記述による。「東觀」は後漢の宮廷書庫の呼称で、ここが道家にとっての蓬萊山に喩えられた。東観同様、秘書省も文書を扱うことから、ここで蓬萊がその喩えとして用いられている。なお、銭起「紫参歌」（『全唐詩』巻二三六）の「蓬山才子憐幽性、白雲陽春動新詠（蓬山の才子幽性を憐み、白雲陽春 新詠を動かす）」でも、「蓬山」が秘書省の喩えとして用いられている。「紫参」は香草の名。この一聯には、本詩二句目にみえる「陽春」も用いられていることから、着想が両詩に共通していると認められる。

○仙子…仙人。ここでは時校書。本詩に先だつ例としては、盛唐・孟浩然「遊精思観、題観主山房」詩（『全唐詩』巻一六〇）の、「方知仙子宅、未有世人尋（方に知る仙子の宅、未だ世人の尋ぬること有らず）」がある。

○溫如玉…君子に対する思いが玉のように穏やかであること。『詩経』秦風「小戎」の「言念君子、溫其如玉（言君子を念ふ、温なること其れ玉の如し）」を踏まえる。この鄭箋に「言我也念君子之性溫然如玉。玉有五德（言うこころは我 君子の性温然なること玉の如きを念ふ。玉に五徳有り）」とある。

2唯予知爾陽春曲

○予…わたし。一人称代名詞。この意味の場合は平声となる。

○陽春曲…古代の楽曲名。歌の格調が高いことを意味する。宋玉「対楚王問」（『文選』巻四五）の、

客有歌於郢中者、其始曰下里巴人、國中屬而和者數千人。其爲陽阿薤露、國中屬而和者數百人。其爲陽春白雪、國中屬而和者不過數十人。……是其曲彌高其和彌寡。

客に郢中に歌う者有り、其の始めを下里巴人と曰ふ。国中属して和する者は数千人。其の陽阿薤露を為すや、国中属して和する者は数百人。其の陽春白雪を為すや、国中属して和する者数十人を過ぎず。……是れ其の曲彌よ高ければ其の和彌よ寡なければなり。

を踏まえる。この「陽春」は高度で合わせるのが難しい楽曲を象徴する。ただ、本詩においては、高度な楽曲というよりは、時校書の詩が他の詩人よりも優れていることを表していよう。というのも、例えば、一句目「蓬萊」の語釈で触れた銭起「紫参歌」の序には、

紫參、幽芳也。五葩連蕚、狀飛禽羽擧、俗名之五鳥花。起故山道人蘭若、尤豐此藥。校書劉公詠歌之、俾予繼組。

紫参は、幽芳なり。五葩蕚を連ね、状は飛禽の羽の挙ぐるがごとし、俗に之を五鳥花と名づく。故山道人の蘭若に、尤も此の薬豊かなるより起く。校書劉公 之を詠歌し、予をして継組せしむ。

とあり、またその詩に「蓬山才子憐幽性、白雲陽春動新詠（蓬山の才子幽性を憐み、白雲陽春新詠を動かす）」とあるように、「陽春」が校書劉公によって作られた歌であることが示されているからである。また、銭起「送李四擢第歸覲省」（『全唐詩』巻二三六）にも、

當年貴得意　当年　得意を貴び
文字各爭名　文字　各の名を争う
齊唱陽春曲　斉唱す　陽春曲
唯君金玉聲　唯だ君のみ金玉の声

とある。この「陽春曲」は科挙の受験生による詩一般を指し、中でも登第した李四の歌が抜きんでていたことが「金玉聲」で表現されていることがわかる。このように銭起詩における「陽春」は、俗人の追随を許さない典雅な楽曲を意味し、本詩では時校書の詩作が優れていることを暗示していると考えられる。

3別來幾日芳蓀綠

○芳蓀綠…「芳蓀」は、香り草。南朝宋・謝霊運「入彭蠡湖口」（『文選』巻二六）に「乘月聽哀狖、浥露馥芳蓀（月に乗じて哀狖を聴き、露に浥いて芳蓀馥る）」とあり、この五臣注に「芳蓀、香草也（芳蓀は、香草なり）」とある。『文選』㈣（二五〇頁、岩波文庫、二〇一八年）は、「蓀」をショウブのたぐいという。「緑」とは、この香草が生い茂っていること。

4百花滿眼不見君

○百花…あらゆる花々。北周・庾信「忽見檳榔」（『全北周詩』巻四）に「綠房千子熟、紫穗百花開（緑房千子熟し、紫穗百花開く）」とある。「緑房」はツボミを指す。

○君…きみ。二人称代名詞。二句目の「爾」に比べて丁寧な言い方と考えられる。

5青山一望心斷續

○青山…暖かい季節となって葉を称えた木々に満たされた青青とした山。隠者の住まいの象徴でもある。本詩を含め、青山は銭起詩に一四例みえるが、例えば、「寄任山人」（『全唐詩』巻二三六）には、「所思青山郭、再夢綠蘿逕（思ふ所は青山の郭、再び夢む緑蘿の逕）」と青山が山人の住まう場所として描かれている。

○一望…遠くを望みみる。南朝梁・王僧孺「落日登高」（『全梁詩』巻一二）に「憑高且一望、目極不能捨（高きに憑りて且つ一望すれば、目極まりて捨つる能はず）」とある。

○心斷續…相手に対する思いが辛うじて繋がっていること。「斷續」は、ときおりとぎれながらも続くこと。銭起以前の用例としては、例えば、南朝斉・王融「巫山高」（『全斉詩』巻二）に「煙霞乍舒卷、猿鳥時斷續（煙霞乍ち舒卷し、猿鳥時に断続す）」がある。これは、もやのたちこめる巫山においてサルやトリの鳴き声が途切れ途切れにきこえることを意味していよ

う。「心断続」は、唐以降に見える語句のようであり、銭起に時代の近い用例としては、例えば劉長卿「江中晩釣寄荊南一二相識」（『全唐詩』巻一四九）の「不見眼中人、相思心斷續（見えず眼中の人、相思　心断続）」を挙げることができる。

〔補説〕

高仲武は、銭起の詩を一二首収めるが、詩体別に整理するとその内訳は、以下のようになる。

〈近体詩〉八首

五律＝四首　五排＝三首　七律＝一首

〈古体詩〉＝四首

五古＝三首　七古〈雑言〉＝一首

高仲武が詩体について、どのような評価基準をもっていたのかは判然としないが、銭起の詩に限って言えば、近体と古体とは二対一の割合、五言と七言については五対一の割合で、近体・五言に傾斜していることがわかる。詩体別から判断すると、高仲武は古体に対して関心が低いように感じられるが、逆にどのような古体詩であれば、高仲武の眼に叶うのか、という基準がこれらの詩を分析することを通して見えてくるであろう。

本詩はまた寄贈詩に数えられる。『中興間気集』所収一二首の銭起詩のうち、「寄贈」に該当するものは、本詩を含めて三首あり、他の二首は「東皋早春寄郎四校書」（『銭起詩集校注』巻六・五排）、「闕下贈裴舎人」（『銭起詩集校注』巻八・七律）であって、いずれも近体詩である。また、小川昭一「唐人選唐詩」（『全唐詩雑記』一四八頁、彙文堂書店、一九六九年）の別表によれば、『中興間気集』における「贈答詩」（おそらく寄贈を含んでいよう）は、全部で一六首を数え、四三首を数える「別離詩」に継いで多い。七言を基調とした雑言詩は、この他、郎士元「塞下曲」（巻下）があるが、しかしこれは楽府であるから、従来の詩に倣ったものと認められる。このように、本詩は寄贈詩としてはいささか非常套的な詩型であると判断できる。

古体詩の寄贈詩として、本詩を改めて鑑賞してみると、人称代名詞が多用されていることが目を引く。二句目の「予」と「爾」、四句目の「君」と、わずか三五字のうち、人称代名詞が三字用いられているのは、やや過剰に感じられる。また一句目の「仙子」が時校書を指しているのは確かだろうから、時校書に対する呼びかけが、本詩において三度繰り返されていることがわかる。この執拗な時校書に対する呼びかけは、本詩が古詩であるという質朴さを表出すると共に、銭起の時校書に対する、強い思慕のあらわれと判断できるだろう。

先に注釈で確認したように、時校書は、銭起が天宝一〇載（七五一）に登第して秘書省校書郎を拝命したときの同僚であったろう（繫年は阮廷瑜『銭起詩集校注』所収「年譜簡編」による）。秘書省を「蓬莱」に、校書郎である時校書を「仙子」に、またその詩作を「陽春曲」にみたてているのは、役所や官職を典雅な場所や人に置き換えているだけにとどまらず、漢代由来のこ

とばを用いることによって、本詩に古風な印象を与える仕掛けとしているようにもみえる。本詩が、古風に感じられるのは、詩体だけでなく、こうした用語にもよっているだろう。高仲武「中興間気集序」に、

伏惟皇帝、以出震繼明、保安區宇、國風雅頌、蔚然復興、所謂文明御事、上以化下者也。

伏して惟ふ、皇帝　出震を以て明を継ぎ、区宇を保安すれば、国風雅頌、蔚然として復興し、所謂文明の御時、上は下を化するを以てする者なりと。

というように、高仲武は『詩経』の精神を重視している。本詩は、こうした『詩経』回帰の、いにしえぶりが評価されている可能性があろう。

本詩には、こうした古風な印象をもたらすしかけがなされているが、注意したいのは、やはり時校書に対する思慕の表現の仕方である。本詩の季節は特定されてはいないが、香草が芽吹き、百花が咲き乱れ、山が新緑をたたえた風景が描かれていることから、晩春から初夏であるに違いない。眼には様々な美しい花々に満たされているのにもかかわらず、それらを友人と共有できていないという銭起の切実な悲しみの表明は、友人に対する清らかな心情の表れとみなすことができるだろう。高仲武が特に銭起の詩を評価したのは、「体格新奇、理致清贍」といった点であった。本詩からは、詩体、及び詩に表出された思い、共に「新奇」「清贍」の双方を窺うことができるであろう。

附記：本稿はJSPS科研費23K00341の助成を受けたものである。